

## 財産家の娘に取り付いた 清勇の狐

### 語ってくれた人

山本登喜夫さん(中里一丁目)

むかし、赤湊川が沼にそそいでいた場所は、今の清勇というところで、樹木がうっそうと茂り、沼では一番魚の釣れるところだった。しかし、土手には狐きつねがたくさんいて人が魚を釣っていると、後ろに置いてあるピクごさごさらっていくことが度々あった。

### 狐汁にでもするか…

ある日、清勇きよゆう近くの村の、源助という百姓が釣をしていた。この日は、特によく釣れ、ピクピクがいっぱいになったので、「さて、帰ろう



昭和五十八年四月五日号

かな」とピクの中を見ると空っぽ。「ハハーン、狐の仕わざだな」と思ったが知らんぷり。また、釣を始めると、黒いものが「サッ」とピクの中へ。源助は「それっ」とばかり、ピクのふたを縄で締めてしまった。家に帰ってから、「さて、狐汁にでもするか」と仕たくをする。助けてくれ、これからは悪さはしないから……」。狐が泣きながらいうので、源助は「それなら、この村から姿を消したら助けてやる」といって放してやった。

すると、この狐は川向こう(今の富士川町)の財産家の娘に取り付き、その娘は病気になるってしまった。

いへらお医者さんに診てもらっても治らず、そこで神主さんにみてもらったところ、娘さんには狐が取り付てあり、その狐の一番恐いの



この附近には昔たくさんの狐が…

は、川向こうの源助さん、ということがわかったぞうだ。

家の人たきは、さっそく源助さんを連れて来て、娘に会わせようとした。

ところが、源助さんが家の戸口まで来ると、娘はあわてて逃げたかと思うと、バツタリとその場に倒れてしまった。そして、狐は娘から逃げ、その娘は、元気をとり戻したとサ。